

坂本邦男さん

1925(大正14)年7月3日生

当時の本籍地 東京都

陸軍 1945(昭和20)年4月、召集
第27対空無線隊

東京大空襲、満州・大石橋、チタ



両親と妹3人で自分が長男。家は押上駅の近くで八百屋をやっていた。近所に北十間川が流れていて、昔はよく魚釣りをして遊んでいた。蒸気汽車が通ると煙で忍者の真似なんかしたり。1940(昭和15)年3月28日、15歳で就職した。父が借金の保証人になって、家が貧しくて上の学校には行けなかった。勤め先では、飛行機のプロペラエンジンのモータをつくっていた。産業戦士だなんて言われてね。

◆1945(昭和20)3月9日深夜、空襲

9日の夜、空襲警報でみな起きたがすぐに解除になったのでまた寝た。日付が変わって10日になって B29がきた。爆音で目が覚めて、外を見たら火の海。これはいけないってんで、バケツで消火しようとしたが消えるようなものじゃない。防火用水の水もなくなったし、自分の身が危ないと思って、父と錦糸公園に逃げた。母と妹たちは先に逃がしていた。

火の勢いがもう凄いなんでもんじゃない。風が吹き付けて、焼けたトタンなんか吹雪みたいに飛んでくる。道の両方から火が出て、火炎のトンネル。これ以上は進めずに押上に引き返したが、自分にも火がついた。北十間川に辿りついて、川の水をかぶって助かった。

夜が明けると、川は水が見えないくらい死体でいっぱい。近くを市電が走っていたけど、真っ黒こげ。家に戻ってみたら、防火用水に浸かったまま白骨になってしまった人がいた。この光景は忘れられない。おふくろや妹がいなくて、みんな死体になってしまったのかと思って、金歯を目印に近所を探してまわった。焼けて真っ黒な死体、白骨、生焼けで蠟人形のようにになっている死体がごろごろしていた。家の焼け跡の前でうずくまって泣いていたら、母と妹たちが帰ってきて、抱き合って喜んだ。市電に乗ろうとして、人が一杯で入れてくれなかったと言う。市電はあっという間に火がついて、母親と妹が見ている前で燃え上がったらしい。

新小岩に父親の生家があって、押上から歩いて避難した。荒川の土手には、避難する人がずら一と列をなして歩いていた。伯父さんの家の一部屋を間借りすることになった、その翌日、11日に召集(現役徴集)の知らせがきた。(本籍がそこになっていた)「仇をとってやろう」という思いだった。

◆1945(昭和20)年4月、入営

3月15日、品川駅に集合した。移動中、列車の窓は塞がれていたが、こっそり覗くと焼野原。4月6日に三重の連隊に入営。1週間後に満州に出発し、第27対空無線隊に配属となった。飛行場には飛行機はなく、張りぼてが置いてあった。本隊は南方に派遣された後の留守部隊で、同期は25名、上官を含めても少ない人数だった。

◆1945(昭和20)年8月15日敗戦。シベリア抑留

飛行場の隅で自殺した上官がいた。ロシア軍が攻めてくると聞き、同期が集まって最後の晩餐と言って、食べられるだけ食べた。誰かが「自決しよう」と言い出して盛り上がり、内心、困ったことになったなと思っていたら、隊長がやってきて説得してくれた。

8月28日にロシア軍に武装解除。釜山に近いが、民間の引揚者で一杯だからウラジオストーク経由で日本に行くと言われて北に向かった。途中で列車の進路が西に向かって、騙されたことを知った。部隊は分けられて別の部隊に合流する形で収容所に入れられた。2年間は伐採作業で、4平方メートルのノルマ。最初の年の冬は、まったく食料が足りずに特に厳しく、朝起きてこなくて死んでいたなんてことも多かった。作業に出たときに、田舎出身の人に食べられる草を教えてもらって、羊も顔負けに食べていた。

ある日、「民主運動」がこれから始まるという噂を聞いた。どんな体操だろうなんて思っていたが、勉強会をやって、仕事が終わった後の夜に、金持ちの息子なんかを人民裁判にかけたりしていた。

最後の3年目は選抜されて収容所を移り、駅の荷下ろし作業になって労働環境はかなり良くなった。

ほとんどの同期とは別の収容所だったが、同期25人のうち、シベリア抑留で11名が死に、2名は脱走して行方不明になっていた。1948(昭和23)年11月27日、舞鶴に上陸。

(取材日:2017年11月12日)